

「女性と家族」について考える

平成 26 年 12 月 2 日 飯田篤司

§ 1、家族とは

第一次的な扶養共同の集団としての家族

- 親族の単位（夫婦、親子）
- 日常的な共同居住・生産と消費の単位（世帯）
- 生活保障の制度（自治組織としての家族制度）
- 情緒的に愛着を感じる情緒的共同性

家族という形態はどの社会にも、どの時代にも普遍的に見られる、客観的に誰もが納得できる形で定義することは困難（例、家族の一員としてのペット）

家族というものは意識的に創造しなければ、永久に作られない状況になってきている。

- 家族の機能
- ・ マードック： 性、 経済の協同、 生殖(再生産)、 教育
 - ・ パーソنز： 社会化、 パーソナリティの安定

§ 2、近代における家族内部の結合の意味の変容

「制度から友愛へ」

- ： 古い制度や慣習から解放され、純粹に人間的な感情（愛情や親密感）によって結びつく集団への変化
- ： 民主的家族、 個人の幸福追求を優先、 結婚の自由化、 生産・娯楽・保健などの諸機能の家族外への譲渡

近代家族の弱点

- ： 凝集力の弱体化、 関心や生活態度の個人化、 連帯感情の低下、 異質な結婚相手である可能性、 血縁地縁の援助の欠如

恋愛意識の変化「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」

- ： 近代社会では愛 - 性 - 結婚が密接に結びついた恋愛意識
 - ： 結婚して一緒に住む、まわりの人に二人の仲を認めてもらえ、性的関係がもて、関係が永続するなど、すべてひっくるめて相手に要求する感情としての恋愛観
- 日本にも近代に導入され、現在のような結婚観が人々に定着。

- ： 恋愛結婚が見合い結婚を上回るのは、1960 年代以後。恋愛に対する世代葛藤も。

§ 3、ジェンダー視点から見た近代家族

ジェンダー：生物学的性別とは相対的に区別される、社会的文化的性別。

社会制度の構成要因のみならず、個人の生き方やアイデンティティの中核的構成要素

近代家族：近隣社会やより広い親族組織から相対的に切り離され、深い情緒的絆で結ばれた親密な親子関係・夫婦関係などからなる家族。

「家内性と公共性」の分離、「女性が家内領域、男性が公共領域」という性別分業の成立

：当時の政治的経済的要因と強い関連性をもって生み出された家族観

：女性は保護という名目のもと労働力としての地位、社会・経済的に生産性のある存在ではなく、出産、育児、教育、家庭の維持といった役割に限定

：女性が独立して社会の中で生活していくことは不可能で、女性は子供の内は父親によって保護され、結婚できる年齢になれば、できるだけ早く結婚し、夫に庇護の下に入らなければならないという思想が一般的に（cf.ルソー『エミール』）

：日本における家父長制的家族の伝統、民法における性差別と是正の難しさ

cf. 市民社会成立以前（前近代社会）

：女性は隷属的な身分にあったが、単に男性に隷属する存在というわけではなく、労働力の一つとして特定の地位

家族の変容

：女性に対する抑圧に対して、その反動として女性の自由と平等を目指した運動（女性解放運動、ウーマンリブやフェミニズム）が展開

男性中心社会への見直しと、新しい家族観への模索

：男性稼ぎ手社会の行き詰まりの帰結としての、「仕事男」と「家事+仕事+育児女」

：女性には家事・育児・介護に加え、賃金労働までも期待

：男性は家族において不在

女性の結婚/家族観の変化と多様な家族の在り方

：女性の社会進出と結婚願望の減少、晩婚化、女性の就労意識の変化、生涯未婚率の上昇、婚姻形態の多様化（事実婚、国際結婚、「姉さん女房」の増加）、離婚率の上昇、熟年離婚、パラサイトシングル、少子化など

結婚/家族観の多様化、リスクとしての結婚？